

# 大陸(南支)

## 反転作戦を顧みて

宮城県 高橋 慶一

私は戦時中の産めよ殖やせよの時代に相応しく、男六人、女三人の九人兄弟の長男として生を享け、長じて尋常高等小学校を卒業して農業の手伝いをしておりました。

そのころ、本家の従兄弟が休暇で帰って来ておりました。私は彼の近衛歩兵の凛々しい軍服姿に憧れ、昭和十七(一九四二)年、十七歳の若さで兵役を志願し、八月に徴兵検査を受けたのです。

当時の徴兵検査は飯野川地区としては大川、二俣、大谷地、飯野川の四区が一箇所集合しての

検査でしたが、私は甲種合格の第一号になり大変嬉しく感じたことが今でも脳裏に焼き付いております。当時としては家族の反対等あるはずもなく、母等は中学にも進学させられないので、自分の思った道を進みなさいと激励されたのでした。その気持ちに反することなく、恥じない行動をとることを心に誓ったものでした。

いよいよ、その年の十二月一日、仙台の歩兵第四連隊に入隊すべしとの命令の伝達を受け、準備万端整えて待機しておりました。当時は既に以前のように出征兵士を華々しく送ることが禁じられており、身内のみの見送りを受け、直ぐ裏の北上川の渡船場より、午前五時ごろ、巡航船「石巻丸」に乗船しました。三時間ほどして石巻に到着、仙

台行の列車で、気丈な母に付添われつつ第四連隊に入隊しました。

入隊後、一週間ぐらいの間は、次の目的地に出発する準備に大忙しの毎日でした。出発は、仙台駅より列車で下関港に、そして釜山港に上陸、鮮満国境から山海関を通過し、北京を経由して南京に到着、ここからは船で揚子江を遡り漢口に到着。再び汽車で応城へ、そして直ぐ近くの城昌で厳しい一期検閲を終りました。

隊には九州から入隊した同姓同名の者が二人おりまして、私は大、一人は小と呼び区別されました。その後、幹部候補と下士候補と、共に南京の教導学校に入校、さらなる毎日の訓練に励みました。覚悟はしていたけれど、この厳しさに耐えなければ人の上に立つことは出来ないし、また自分から進んで志願したことはありませんので、挫けそうになる自身を叱咤激励しつつ、何とか六カ月間頑張りました。この努力の甲斐があり百人中三十人の選抜合格者の一人となり伍長に任官、分隊

長を命ぜられ、湘桂作戦に参加しました。

それまでの戦闘において敵より分捕ったチェコ銃は軽くて自動と聞いていますので便利に使用していますと、友軍より敵と間違われ、危なく攻撃を受けるところでしたが、大事に至らず安どの胸を撫でおろしたこともありました。

その後、戦況は不利になり反転作戦となりました。この間の戦闘は山岳戦に、あるいは敵襲に反撃するなど、大陸の広野を昼夜を分けず、しかも食う物にも事欠きつつの奮戦の連続でした。

間もなく軍曹に任官するや、今度は擲弾筒分隊長として、また部隊との連絡下士官として、軽装で山岳や平野を走り回るといふ大変な任務でしたが、何とか使命を果たすことが出来ました。これも体が壮健なる故で、この体を与えてくれて親に感謝の念でいっぱいでした。

ある時の山岳戦に我が分隊が敵に包囲され、必死の抵抗をするも衆寡敵せず、と思いきや援軍来たり皆で安堵の胸を撫でおろしたこともありまし

た。

南支での暑い暑い戦いがまだまだ続くのかと思  
っていた矢先の昭和二十年八月十五日、突然の終  
戦に、気力が一気に抜けた感じで、お互いに顔を  
見合わせていつときは一言もありませんでした。

間もなく命令により長沙に集結しました。そし  
て武装解除となり、これまで命より大切にしてい  
た兵器が山積みになされたのを見て、敗戦の哀しさ  
がヒシヒシと身にしみ込む思いでした。

中国での捕虜生活は労働を強いられることもな  
く、ただ自分たちの毎日の食事に追われる生活で  
した。そして一年ほどした昭和二十一年六月、長  
い間故郷の山河を夢見ていたのがようやく現実  
に近づくことになりました。

上海にて乗船しましたが、あのとき、行きがあ  
って帰りがないと覚悟して渡った玄界灘を、再び  
元気で航行し、懐かしい日本の佐世保港に上陸、  
各種消毒を終えて復員列車にて出発したのです。

途中の大都市の爆撃の凄さに驚くと共に、これ

では終戦にならざるを得ないと実感しました。降  
り立った我が仙台も見る影もありませんでした。

故郷に近づくにつれ東京からみる故郷の山河は  
何の変りもありませんでした。はやる心に鈍行列  
車は遅く感じつつも、我を知らずに待っていた家  
族の下に帰り着き、皆驚きの中にも抱き合っ  
て喜びました。戦死された皆さんにはこの喜びを  
味わえなく本当に申し訳ない思いでいっぱいです。

しかし僅かの月日に大変な戦後の訪れとなり、  
何もかも無い無いづくしの中で復興は大変で、食  
糧不足の戦後をどう立て直すか亡き戦友の分まで  
頑張らなければと脇目もせずに努力しました。

今日、経済大国になり何不自由のない暮しが  
出来るようになったのを見るにつけても、異国に散  
った皆さんの土台があったからこそ、このことを  
忘れてはならないと思います。

私も妻を迎え二人の平穏な家庭に毎日を健康第  
一に、家族に迷惑を掛けずに余生を送りたいと思  
っております。